博士は我が友！

ユーヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
博士は我が友！

【Ｎコード】
Ｎ４６２６Ｃ

【作者名】
ユーヨ

【あらすじ】
高校二年の夏。毎年の如く宿題を後回しにする人と、オカルトな趣味がある人の話。

プロローグ

ようやく規則正しい学校生活から開放されて、ダラダラ毎日を無為に過ごせるようになって一週間弱。暦は八月に突入した。
そう、夏休みである。何者にも俺の起きる時間は左右されないで寝ていられる、長期間の休暇である。休暇、というのであるから勿論毎日暇である。宿題課題はあるけれど、そんなものは後でやればいい事なので、毎年の如く休暇の最後に焦り、苦しむ事は十分解っている。だけど宿題課題に手が伸びないという心情は、きっと誰でも解ってくれるだろう。
寝てる時間を人には左右されないのだが、気温が高いとどうしても目覚めてしまう。
そして今日も八時という割かし早めに起きてしまった。あぁ眠い……

重いまぶたをこすりながら、自室を出て階段を下りていく。キシキシ軋む階段を通過してトイレに赴き、用を足す。その後リビングに向かう。
リビングにはいつものように、妹がアイスなどをほうばりながらテレビを見ていた。そして俺の存在に気がついたのか、
「お兄ちゃん宛に手紙、きてるよ」
とちらっと俺を見ながら言った。テーブルの上に新聞紙と俺宛の封筒があった。それを手に取り、眺める。そしてある事に気付く。
「なぁ、これ『親展』って書いてあるよな？」
「しんてん？何それ？」
中二にもなって親展を知らないとはな……兄としてこの妹の無知が恥ずかしいぜ、まったく。
「……誰が開けた？」
「……気になっちゃって……あはは…」

今度こいつ宛にきた手紙を勝手に読んでやろうと決意して、
「まぁ、いいけどさ。でも今回だけだからな」
と、軽くあしらって既に汚く開封されている封筒を再度眺める。知らない住所からで送り主の名前が書いてないという怪しさレベルが非常に高いものであった。でも怪しいだけに面白そうだ。
「その送り主の人、頭大丈夫かな？」
と言う妹の言葉を聞いて封筒の中身に興味を持ちながら、中身を取り出す。
中には普通の便箋が入っており、三つ折にされていた。それを広げる。最初は綺麗な文字で始まっている。

『突然の手紙で申し訳ないけれども、この手紙を最後まで見て欲しい。
私の名前は博多屋　士歩といいます。二年一組なので多分知らないと思うけど。
そんな事より、何故何の接点も無い彼方にいきなりこんな手紙を送ったかというと、いきなり直接会ってこの後に書く事を伝えるのは非常に恥ずかしかったからだ。
そんな私は博士であります。一体何の博士かと言いますと、ＵＦＯとかエイリアンとか、オカルトじみているけどそういう飛行物体や生命体は実際にいる。
私は信じています。きっと彼等は存在しているということを。
ちょっと聞いて欲しいんですが私は一回だけ第一種接近遭遇を体験しました。それは小学校六年生の時だったけど今でも憶えています。それがきっかけになって、わたしは博士になったんです。
この手紙はとても怪しいけど私は然程怪しくありません。と自分では思っています。
もしよかったら、夏休み中に私の家に来てください。なるべく早い方がいいです。今日でも構いません。
そこで、何故彼方にこの手紙を送ったのかお話しましょう。

二年一組

博多屋　士歩

マンションの番号です→５２４』

……三回読み返してしまった。何これ？この常体と敬体がごっちゃな文は？いや、そんな事はどうでもいい。何故、名前も顔も知らない、面識も無いこの俺にこんなもんを送ってきたのか？

……だが、ＵＦＯやエイリアンに興味は無いがこの博多屋　士歩に興味が有る。

いきなりの、あまりに臍茶で常人では書けないし送れないような手紙。

いいね、面白そうだ。普遍的な生活から離脱出来そうだ。

つまらなかったすぐに帰ればいい。

行ってみる価値は十分あるだろう――

一章

「ちょっと、出かけてくる」
服を着替えて、まだ時刻は八時半だというのに外出する事を妹に伝える。
「手紙に書いてあった場所に行くの？」
「一応な。面白そうだしな」
「ふ～ん……気をつけてね～」
妹に背中で見送られて玄関の扉から外に出る。住所の書いてある封筒と便箋を持って。
外は暑かった。快晴とまではいかないが、それでもかなり晴れていて蒸し暑い。雨も降りそうにないので、洗濯物を大いに干せる一日となるだろう。
住所はあまり遠くない場所だったし、俺の知っているマンションなので歩きで行くことにした。たまには汗を流すのも悪くない。
多分二十分くらいで到着するだろう。

そのマンションは結構高級なマンションだった。昔、今はもう引っ越していないけどここに住んでいる友がいたので頻繁に来ていたころがとても懐かしい。
ともかく俺は自動ドアをくぐり、インターホン前に立って便箋の最後に書かれていた番号を入力するために便箋を確認する。
「…５２４っと」
ピンポーンという音がして数分して、
「……はい……お、おおっ！神野君！早くも来てくれたんだね！」
初対面なのにいやにフレンドリーだったのでどういう返答をしていいか迷っているうちに、扉が開いて
「五階の５２４ってプレートがある所だから。あと博多屋って表札

もあるしね。早くきてね！」
と言うとぷつっと音がして回線が切れた。何も言えなかった。言う暇もあまり無かった。まぁ、いいぜ別に。時間はまたっぷりある。解答を聞くには十分過ぎる程にな。
俺はゆっくり向かう事にした。

再びピンポーンと機械音を鳴らす。三秒しない内に扉が勢いよくぶち開けられ、危うく顔を打つところであった事を、この博多屋士歩は知らないであろう。
「上がって！早く！」
そう言うこの女は、博士っぽく白衣などを着ている。面白い人だ。
中からは冷風が出てきているのできっと、クーラーでも点けているのだろう。嬉しい事だ。
何も言わずに上がって、先行く彼女の後をついて行く。リビングに続くであろう廊下は朝だというのにも薄暗かった。電気ぐらい点けてくれよ。
「まぁ、汚いとこだけど……いや、汚くはないな、うん。ちゃんと掃除してるし。本が体積してるだけであって週二回は掃除機かけてるから汚くはない」
確かに本の量が凄いな。重ねて置いてあるのとかが俺と同じぐらいの高さになってる。それが雪崩れているので本で床が見えない。だけど道が出来ている。リビング中央のテーブルまで本が綺麗にかたずけられて道が出来ている。
「とにかく座って、手前の座布団に。奥のは私のだから」
そう言われたので手前の座布団まで移動する。そして座る。後から来た彼女につまずかれる。
「ごめん、暗いからさ。周りが明るいと集中出来ないから、カーテンは閉めてるんだ」
俺はそれに対して「大丈夫」とだけ言っておいた。初めて彼女に話した言葉だった。

彼女は俺の前に着席した。そしてテーブルランプを点ける。とても明るかったので思わず目を細めてしまう。が眩しさに負けないで問う。
「あの…博多屋さん――」
と次の言葉を続ける前に博多屋さんは俺の顔の目前で手をバッと広げて、
「待って、聞きたいことは多々あると思うけど先に私に話をさせて。あと博多屋じゃなくて、気軽に博士って呼んでください。白衣着てるしね」
「あ、そう？じゃあ博士」
そういうと博多屋さんはうっとりしたように
「博士かぁ……ふふ……」
などと呟きにやけていた。
数秒後、思い出したように語りかけてくる。頭大丈夫か？この人。
「神野君。ドレイクの方程式っていうものを知っているかな？」
「いや、知らないな。聞いたことはあるけど」
オカルトな方程式って事だけは確かだろう。オカルト等にはまったく興味は無いので知らないのも当たり前である。なんかテレビで聞いたことあるような、ないような、そんな程度だ。
「ドレイクの方程式っていうのはね、宇宙にどれだけの地球外生命体が分布しているか推定する方程式なんだよ」
「博士、質問です。そのドレイクの方程式を使って計算すると、地球外生命体はどれくらいの数になるんですか？」
それには少し興味がある。博多屋さんもなんかのってるし、来てよかったかもしれないと思った。
「えっと、色々と考え方があるんだけど、一千万ぐらいかな？」
「そんなにいたら地球にいてもおかしくないじゃないですか」
まったくだ。そんなにもいるんだったら、今まで生きてきた中で一度はお目にかかれるであろうに、俺は遭遇した覚えなどない。
「それはフェルミのパラドックスといってね、エイリアンは潜伏し

ていたり、会っていても何かに擬態していたりとかまだ地球に来てないとか色々あるんだけどね。きっと気がついてないだけだよ。私はＵＦＯは見たんだけどね。あれは絶対、球電とかじゃなかった。第三種接近遭遇とかはしてないな」
オカルト素人には何が言いたいのか理解出来ない。出来たらすごい。だからもうさっさと本題を聞き入りたいところだ。
「エイリアンの事とか、博士の趣味も多少は理解できた。だから教えてくれないか？あの手紙の最後の事をさ」
「いいよ、別に。でもちょっと待って。のど渇かない？飲み物持ってくるから少し待ってて！」
と言い残して台所であろうと所に向かっていく。暗いもんだからよく見えない。こんな暗がりにずっといたら、外に出た時に日光でぶっ倒れるんじゃないか？
　等と考えていると博多屋さんの向かっていった方で明かりが点く。台所は本などが体積しておらず綺麗だ。火の気のある所で本など危なくて読めないだろうからな。
「何飲みたい？」
「何でもいいですよ」
と少し大きめの声で答える。
「う～ん…何がいいだろ？」
そう小声で聞こえた後に、台所からひょこっと顔を出して、
「お酒とか飲む？」
「いや、飲まないだろ普通」
何を思ったのかこの女は。何でもいきなりが好きなのか？いきなりの手紙の次は、いきなりの未成年飲酒の誘いとは頭がどうかしているのだろうか？
　そんな事を思っていた俺はそれが表情に出たのか博多屋さんは繕うように焦って
「別に、私はお酒とか飲まないよ。たまに大人の人とか来るんだけど、その人の残していったやつだからね。何で飲むって聞いたかと

いうとね、なんか神野君はお酒飲んでるかもってイメージがあってさ」
どんなイメージだよ！まったく人を見かけで判断しないで欲しいぜ。
「何があるんだ？」
「……今あるのは、コーラとアップルとオレンジジュースとアクエリと麦茶」
すごい色々と入ってるんだな、博多屋家の冷蔵庫には。俺の家なんて麦茶しか入ってねーのになぁ。裕福な家はいいなぁ。
「じゃあコーラで」
来るまでに汗をかいたので、普通はアクエリだろうが今は炭酸飲料が飲みたい気分であった。
「解った、今持ってく」
台所から出てくる博多屋さんの手には大きめのコップが二つ持たれていた。暗くてよく見えないが多分コーラとアップルであろう。
彼女がテーブルにコップを置く時にふと思った事を聞いてみた。
「博士ってさ、一人暮らしなのか？」
この本が体積している空間に他人との共有スペースなど無いに等しいこの場所でどうやって共存していくというのか、出来たらたいしたもんだ。
「そうだよ。親は両方海外で仕事しててね、全然帰って来ないけどお金は送られてくるから生活出来てるんだ」着席した博士に、
「大変そうだな、一人暮らしって」
そう言ったら博士は、
「そんなことないよ。自由でいいもんだよ。まぁ家事は自分でやらなきゃいけないけどさ、円盤観測とかしててたまに深夜三時過ぎに帰ってくるときがあるんだけどね、何にも言われないから」
円盤観測って何だよ？あ、ＵＦＯの事か？
「でも寂しいだろ？」
「…うん、ちょっと」
今の言葉で空気を重くしてしまった事を今になって気付いた。博士

に悪い事聞いたなぁと思いつつ、俺の本題に入る。その前にコーラを一口飲んで、
「それで、手紙の最後のやつ説明してくれ」
博士も一口飲んでから、
「……結構恥ずかしいんだよね。理由が曖昧っていうか、納得出来ないようなのだから。だからあんまり言いたくないんだけど、話するって書いたから一応するけどさ」
まぁいいんじゃねーの、別に。理由がどんなに曖昧模糊であろうが青息吐息が出るようなものだったとしても、俺は聞きたい。
　数秒間が空いた後に、
「別に神野君じゃなくてもよかったんだけどね、女子でも構わなかったし神野君の友達でもよかったんだけど、やっぱり神野君が一番合格点に近かったから」
「合格点？」
しかも近いって事は合格してねーじゃねーか。どうせなら合格したかった。
「…私の助手」
「……助手？」
「最初は私のいるクラスからにしようと思ったんだけど、いい人がいなくて。そんでね、次は二組の人からにしようと思ったんだけどこれもまたいなくて。そんで三組。で三組にはいい人がいた。それが神野君」
なんだが意味が理解出来ないんだけど、とりあえず。
「合格のための審査ってやったのか？」
「勿論！審査はね、まず従順な人である事。神野君を陰から見てたんだよ、気付かなかったと思うけど。神野君はあれこれ言っても優しい事が解った」
博士にとっては優しいと従順は紙一重らしい。
「次に、退屈してる人。する事も成す事もない、暇人がよかったんだよね。神野君が一人で下校してる時に、『あ～つまんねぇなぁ』

って言った事が大きなポイント加算になったんだよ」
コーラをまた一口飲んだ。褒められてんのか？それとも馬鹿にされてるのか？
「そして最後に、人間性が面白い人」
……なんかすごい、馬鹿馬鹿しい。意味解んないしさ、助手とか。
誰にも理解も共感も出来ない、おかしな理由で俺をこの場に呼んだというのか？そう思うと笑っちまいそうになるぜ。
でも、でも面白そうだ。助手か……いいかもしれない。夏休みを無為に経過するより、この博士のもとで何かしている方がきっと楽しいと思う。都合のいい暇潰しだ。何よりこの博士の家はとても涼しいくて快適で嬉しい。
「俺が助手になることはもう決まってる事なのか？」
「そんな、強制じゃないけどさ。やって欲しいかなって……きっと楽しいよ」
「何か俺が助手に抜擢された理由はよく解らないけど、面白そうな気がしないことも無い。いいよ、どうせ毎日暇だしな」
俺は自分自身でも驚くくらいにあっさり承諾してしまった。
「本当？よかったよ。じゃあ神野君、これからよろしくね！」
握手を求めてきたので黙って手をのばして握手をした。少し恥ずかしくなった。
「ところで最初に見た時に思ったんだけど、その白衣ってなんで着てんの？」
博士は立ち上がって、
「博士っぽいじゃん、白衣とかさ。どう？似合ってる？」
回転しながらそう言う。返答に困ってしまうが、
「似合ってると思うよ」
と答え、薄―く茶を濁した。

その後、基本の知識としてＵＦＯやエイリアンの常人なら決して

信じられないような話を二時間ほど聞き流して、最初に話した事など今更質問されてもその答えはもう頭中から雲散しているので、答えられなくて当然だろう。だから答えられなかったからって、怒らないでほしい。まったく困ってしまう。
「グレイだ！それはグレイだろ？」
「せいか～い。十問目でやっとせいか～い」
別に間違ったっていいじゃないか！テストだって俺は十問以上間違えるんだからな、俺は。頭良くないんだよ、あんたと違ってさぁ！だからそんなに不機嫌にならないでほしい。対応に困ってしまう。
「もっと、頑張ってほしいなぁ……」
「無理だろ…いきなり色々難しいこと沢山言われて、ごっちゃになってるんだから。ＵＦＯの型を最低十個答えろなんて無理だし、ハイネック博士の分類なんて、もうそれ誰だかすら忘れたから」
少し間の開いた後に、
「……うん、そうだね…まだ最初だから仕方ないか！段々覚えていく気なんでしょ？まぁ、いいよ。頑張って」
博士の機嫌が回復した。これで気まずい雰囲気ではなくなった。一安心だ。
「じゃあ神野君、今日はもう終わりって事で。手紙出した日に来るなんて思ってなくて、寝たの四時でさ。すっごい眠くて眠くて」
「そういえば、この封筒切手貼ってないな。直接ポストに入れに来たのか？」
もし、そうだったら何故俺の家の場所を知ってるのか？ってなるだろうが、方法は解らないが場所ぐらい知っているのだろう。ストーキングとかか？
「今日の三時にぐらいに入れに行ったんだよ。家に切手無くてさ、買いに行くのも面倒だから直接出したんだ。それより目の下にくまとか出来てる？神野君が来た時に起きたから何もしてないんだよね」
三時に出しに来たとか、どういう生活をしているのか気になってしまう。体を壊してしまうんじゃあないか？

「出来てるな」
「やっぱり？なんか体がだるくて、この頃。クーラー点けっぱなしだからかな？」
健康が心配だ。外にあまり出ないのか肌が普通よりも白い気がする。
「それじゃ帰るわ。よく寝て元気になって下さい」
立ち上がる俺に、
「ちょっと、待って。家で勉強してもらうために、本渡すからちゃんと読んで来て」
そう言って周辺の本を五・六冊選んで近くにあった紙袋に詰めてもらった。かなりの重量である。読む気が喪失した。元々無いけど。
「頑張って読んでくるよ、一応」
それでも、やる気を見せといた。
「うん、頑張って。それと明日は三時に家に来て。あ、深夜の三時だからね。遅れないように」
「深夜の三時？正気かよ……」
深夜の三時に出歩いた事など、初詣ぐらいしか記憶に無い。かなり難しい起床時間だ。
「無理？」
「……頑張ってみるさ」
そういって玄関に向かって行く。そして靴を履いて、紙袋を持って
「さようなら、また明日」
「遅れないように！」
別れの挨拶を交わして扉を開けて、外に出た。
　雲の抜け間から太陽の日が差し込んでいる。眩しい。眩しすぎる。しかも暑い。この暑さの中を徒歩で帰宅せねばならないと思うと、すぐにでも今出てきた扉の中に飛び込みたくなるが、そうもいかない。
　俺は倦怠感を抱きながらも、ゆっくりと歩き出した。

二章

昼間の日差しにさらされながら、汗を滝の如く流出しながら帰宅。紙袋に入っている無駄に重かった本を玄関に放り、不快な汗を洗い流すため浴室へと向かっている途中で

「あ！お兄ちゃん！どうだった？」

と呼びとめられたが、

「後で話すから……」

とその場を流した。

そして浴室に到着。

さて、たっぷりかいて不快になった汗も流しますか。

シャワーを浴びていて、ふと何の因果も無く思ってしまった事がある。俺は一体どうやってストレスを解消しているのかなぁと。

人間ならば誰しもがストレスを持っている。それをどうやって解消するかは人それぞれだが、俺は一体どうやって解消しているのかいまいちよく解らない。まぁ、解消している事は確かな事だ。だって解消してなかったら、溜まったストレスが爆発でもなんでもして禁断症状でも起こしてしまうだろう。

昔のドラマみたいに夕日が沈む川に叫ぶ事など恥ずかしくて出来ないし、と言うより馬鹿げている。本当にそんな事した奴なんていないだろう。しかも俺には打ち込める趣味も無い。そういうところでは少し博士が羨ましい。彼女にはとっても面白くて打ち込める趣味がある。

俺には無い。

だが、思った。こうして汗をかいた体を洗ってすっきりする事でもストレスは解消するんだと。楽しい事や気持ちのいい事をすればストレスは少しでも無くなる。

ストレス全てが雲散霧消する事はない。ちょっとずつでも溜まっていく。それを発散する為の事をする。
その無限連鎖だと思ったら、悲しくなる。人間って何だかとっても面倒な生物だなぁって。
そう、思った。

浴室から出て五分。着替えをすませて、渇いたのどを潤すため冷蔵庫のある台所に向かう。リビングには我が妹が、先程俺が帰宅した時に玄関に放っておいた紙袋に入っていた本を熱心に読んでいた。何がそんなに面白いのか知らないが、とにかく冷蔵庫から出した麦茶をコップについで飲む。
妹は本から俺へと視線を移して
「それで、どうだった？」
と質問されたので、俺は麦茶を飲みほしてから覚えている限りの事を妹に語った。

五分ほどで話し終えた。
「助手って……よく承諾したね」
「なんか面白い人だったからな。そうそういないからな」
「まぁ、そうだろうね。お兄ちゃんを陰から見てる人なんてのは、そうそういないよねぇ」
などと、感想を聞き入っていた。妹の感想など別段聞きたい訳でもないが、暇を持て余しているのでとりあえず、聞き流さないでいる。
「だけど気を付けてね」
何故だか解らないが、妹の小さく漏らしたその言葉が妙に気になった。
「なにを？」
顔を見ながら言ったが、妹は俺から目線を逸らして返答は無い。

すると、妹は立ち上がって、
「じゃあ私はこれから出かけるので」
さっきの言葉の意味を聞きたかったけど、まぁそれほど聞きたい訳でもないので別にいいさ、どうでもな。
「……そうか。じゃあな、いってらっしゃい」
見送りの言葉を言って、もうお昼時だが、カップ麺すらつくる気が起きないので二階の自室に行く事にする。
何畳かしかない自室で何かするべき事は無いかなぁと考えたら宿題の事が頭によぎってしまった。
「いや……まだ大丈夫だろ」
過酷な現実を逃避したくなったので寝る事にした。
悲しくなってしまう。

正直なところ、誰もいない車も走っていない道を歩くのは怖い。虫が鳴く音しか聞こえない。怖い。そんな俺の心の支えは街灯の光だけだ。
時刻は午前二時四十分を過ぎたあたり。まともな人間は布団やベッドで休憩している時刻だ。怖い。本当に怖い。博士のメアドか番号聞いとくべきだった。そしたらメールか通話出来るから、それをしながら博士の家まで行けば今の気分をまぎらわせただろう。今日聞こう、と思った。

ピンポーンとインターホンを鳴らした。微妙な光しかない薄暗い廊下はまだよかった。エレベーターの中は本当に感情が恐怖で埋め尽くされる感じがした。人間は恐怖状態になると、脚など筋肉に血液が集中されて普段より素早く動けるとか。さっきの俺ならきっと百メートル走でいい記録を出せたと思う。

そんな事を考えてしまうのはきっと早くこの恐怖心から開放されたいからだろう。あぁ、早く出て来い！怖いんだよ俺は！
扉がゆっくり開いて、クシャクシャの白衣をきた博士が登場してくれた。
「こんばんは」
と言ったのは俺で
「うん…こんばんは…」
自分から来てと誘っておいて、こんなに眠たそうな顔をされたのは初めてだ。だが、まぁいいさ。実際本当に眠いんだろう。だって、俺も寝たいと思う。『もう、研究とかいいからさ一緒に寝ちまおうぜ』なんて事は言いたいが言えない。寝たいという純粋な気持ち以外に他意はないけれども、絶対にいやらしい方の意味で解釈されるからだ。
「今から何すんだ？」
「円盤観測。上がって」
言われるままに家に入っていく。今日の午前に話をしたリビングの奥にある襖を開けた。やっぱり前と同じく廊下は暗くて部屋は涼しかった。
襖の奥の和室には、これもやっぱり本が堆積していた。部屋中央には布団が一枚敷いてありその周りだけはきちんと本が片付けられていた。
「あそこに望遠鏡あるからさ…空見といて。なんかあったら私に言ってください。寝てるから」
そう言うと中央の布団に潜ってしまった。助手って何これ？絶対見つかりもしない飛行体を見つける役なのか？
「…絶対何も無いって。本当にこれやるのかよ」
そう漏らすと博士は上半身だけ布団から起こして、
「しっかりやっといてください」
そんなに、なげやりでいいのか？と思うくらいな事を言って再度潜った。

まぁまぁまぁ、いいさ。まだ初めだからそんな面倒な事でも黙ってやってやろうじゃないか。でもな、何度もこんな事させたらもう来なくなるからな。助手とかいう無償ボランティア活動を放棄するからな。

そんな事を考えつつ、望遠鏡の方へ行く。

空の方へと向けてある望遠鏡を覗き込む。

結構星が見えた。意外に綺麗だった。そして博士の寝息が聞こえた。人の苦労をよそにすぅすぅ眠っているので少々腹が立ち、寝息でも窺ってみようかと思ってしまったがやめた。理由は特に無い。何となく、だ。

星座とか見えるかな？ほら、あれ何て言ったけか？ベガとアルタイルとデネブのやつ。名前が出てこないけどそんなやつ。あるかな～

ちょっと楽しくなってきた。

だがそんなに長く星を見ていられるほど、星に興味は無い。二十分ぐらいだろうか。興味が無いものに対して二十分も打ち込めたなら結構な事だろ？

さて暇になってしまった。本当に博士の寝息でも窺ってみようかな？いや、でもあれだ。俺は今日初めてこの博士に出会った。だから初対面というやつだ。その俺が初対面の女子に寝息を窺うなんて、あまりにも馴れなれしいんじゃないか？

じゃあもう帰っちゃおうか。でも今すぐには帰りたくない。またあの夜道を歩行したくない。

ならもう出来る事は一つしかない。寝よう。少し肌寒いけど大丈夫だ。

望遠鏡の横で仰向けに寝そべった。

静かだった。そりゃあ夜だから静かに決まってるけど、なんか特別静かな気がする。二人の呼吸音しか聞こえない。

横向きになって博士の方を見た。結構距離があるのと暗いので顔

は見えない。俺はぼや～っとしか博士の顔を覚えていない。そんな初対面の人と一緒の部屋で寝ていると思うと、それはとてもおかしい事だ。

まぁ、いいけどね。どーでも。

二章（後書き）

まともな文が書けないので困りました。

三章

「あぁ……う」
突然、体が揺れ始める。身体が異常状態に陥ったので、眠りから覚めてしまう。
何処からか蝉の声が聞こえてくる。一ヶ月という短い期間しか外で生きられないのは、俺としては儚いと思うが、正直うるさい。朝に鳴かないでほしい。
「おはよう。ちゃんとやったの？円盤観測」
俺の体を異常状態にしていたのは博士だったのか。予想はしていたけどさ。
「…ちゃんとやったさ。でも４時ぐらいになったら外が明るくなってくるだろ？だからもうこんな明るいんじゃＵＦＯもでないだろうな、と思って眠りについた訳だ。さぼったりはしてないから」
起きてすぐにこんな嘘をつける俺はすごいと思う。普通なら寝起きだから思考も鈍っているだろうから、俺は寝起きがいいのかもしれない。
「何か変わったことは？」
「いや、特に無いな」
そう言った後、俺の横に正座していた博士は立ち上がり、
「今１０時ぐらいだけど、どうする？帰る？それともなんか食べてく？」
腹が減っていたので、食べていくことにした。
「じゃあ、せっかくだから食べてくよ」
「何食べたい？」
そう言われても困る。何があるのかわからないからな。別に何でもいいんだけどね、不味くなければ。
「何があんの？」
「え？あぁ、色々あるからね。なんでもいいから好きなの言ってよ」

無いものを言ってしまった場合博士が困ると思ったのでどこの家庭にもある、
「目玉焼きがいいな。朝は目玉焼きがいい。すぐ出来て美味しいからな」
「目玉焼き……わかった。つくるから机で待ってて」
寝室からリビングの小さい机に移動して、博士はキッチンへと移動した。

何分か経って「出来た」と小さく聞こえて、皿を持ってリビングにやってくる。目玉焼きの入った皿とご飯の入った皿を受け取った。
「何かけるの？」
「ソース！ソイソースじゃないからな、ソースだ！」
男は黙ってソースをかけるのだ。譲れないこだわりといえる。醤油派になんと非難されようが俺はソース。ソースなのだ。
「私もソース」
ソース好きに悪いやつは結構いないので、
「いい友になれそうだ」
と言っておこう。
そして博士がソースを持ってきたので、食べる事にした。

黙々と会話をしないで少し気まずい感じで食べていたので、耐えられなくなり、
「明日もあるのか？」
などと質問してみた。どうせあるだろうと思いながらも。
「うん、あるよ。…嫌になったの？」
「いやそういうわけじゃなくて、何時からかなと」
正直好きではないけど。
「今日と同じ、3時から」
また、夜間歩行しなくてはならないのか。と思ったら、ふと思い出

したことがある。
「なぁ、ちょっとお願いがあるんだが」
「何？」
「メアド教えてくんない？」
夜道を一人で歩くのは心細い。さらに怖いので、恐怖心を緩和したいのでメアドを聞いたまでだ。
「そういえば、知らなかったねお互いに。いいよ、連絡する事もあるだろうし。食べ終わったら教えるよ」
「ありがたい」
深謝して、また黙々と食事をする。

食べ終わって、博士からメアドを聞き、する事がなくなったので帰ることにした。
「明日も3時だからね！忘れないように」
「わかってる。それと、2時半ぐらいにメールすると思うから、返信してくれ」
「……わかった。でも何で2時半？」
「……夜道を一人で歩くのは心細いから…」
「へぇ～。神野君て意外と怖がりなの？」
「人は見かけによらない」
「うん、わかったよ！ちゃんと返信するから。じゃあね、また明日」
「さようなら」
扉を閉めて思った。
帰ったら寝よう。何か疲れた。
でもまぁ、なんかこういうのは、いいな。

四章

助手という無償ボランティア活動を請け負ってから二週間ぐらい経った。よくもまぁ、こんな活動が続いてるなぁと、我ながら感心しているが、そろそろ宿題もやり始めなければならないという焦りも感じつつある。

でも、大丈夫だろう。いざとなってしまったら、友達や博士にでも手伝ってもらう。我が友のほうはたぶん手伝ってはくれないと思うが博士は手伝ってくれるだろう。というよりもそれくらいしてほしい。俺だってあんたの為に毎日意味の無いような事をやっているのだから、少しぐらい俺の為に何かしてもいいんじゃないか？

いや、本当にやばいんだってば。このままの現状を維持し続けたら、一週間後のはもう血を見ることになっちまうだろう。俺には不退転の決意なんて実行できないからさ、助けてくれよ――

「――という事なんだけれど、どう思う？」

今の時刻は午前十二時を過ぎたあたり。場所は小さな山の展望台のようなところ。空はすっぽり晴れていて、いくらかの星が煌めいている。月もぽつんと浮かんでいる。

「…いざとなったら手伝ってもいいけど、やっぱり自分の力でやらないと」

いくつかある水銀灯の光で何となく表情が窺える。あきれているような表情だ。

「なるべく頑張るからさ。いざとなったら頼みます！」

「うん、わかった」

といいながら博士は望遠鏡を設置している。今日はここから円盤観測だ。

「……あのさ毎日この円盤観測やってるけど、他には何かやらない

のか？」
俺は望遠鏡無しで空を見なければいけないので、地べたに座り上を見上げる。そこらの草むらから聞こえる、虫が鳴いている音。いい感じに風が吹く。気持ちのいい開放感に浸れた。
俺の憤りを虫が静めてくれた。俺の悩みを風が脳から運び出してくれた。
崩壊と開放があった。気持ちがよかった。
「私はＵＦＯの写真とか映像とかそういう物的なものはいらないけど、もう一度見てみたいんだよ。ただ純粋に。だから円盤観測しかしない。……例えば私がＵＦＯの写真を撮ってそれで気持ちよく満足していても、他の人にはそれが嘘だって言われるかもしれない。そんなの嫌だから、この眼で見るだけでいいんだけど、なかなか見れないんだよねぇ……」
望遠鏡を覗き込んでいる博士の表情は見えない。
俺はそのことを聞いて、考えることや思うことが出来るって大変だなぁと思った。だって意見が違ってしまうから。これが絶対あってるってことが無いことを嘆かずにはいられなかった。結局俺が心から信じてるものも、他人から見れば馬鹿みたいなことにしか思えないだろうから。
「俺なら写真ぐらいはほしいかなぁ…記念として」
そう博士に聞こえたかわからないぐらいの声で呟いて、地面に寝そべる。ひんやりしている。
少しの間そうしていたら、水銀灯の光が消えて真っ暗になってしまった。心細いが寝るのには都合がいい。暗ければ顔が見えないから寝ていても、博士に怒られないので安心だ。安心だ……
「ねぇ神野君。夏休みが終わったらどーするの？助手やめるの？」
…まぁそうだろうな。時間も暇も無くなってしまうからな。だけどそれは仕方ないことだ。
だから悲しそうに言わないでくれ。
「あ～……どうしようかな…考えとく」

あえて答えは出さなかった。答えは変わらないだろうが今は言いたくなかった。言ったら悲しくなる気がしたから。俺が。
「やめたくなったら言ってくれればいいから」
博士は変わらず望遠鏡で空を眺めている。何も飛んでいない空を、ただ眺めている。
「代わろうか？」
寝ようと思ったがやめた。地面が硬すぎて眠れないからだ。こんなところで寝てしまったら体が痛くなる。
「まだいいよ。疲たら言うからその時に代わってくれればさ」
「そうか」
する事も無く暇なので、また寝そべり空を見る。
　濁って輝いている星しかない。満天の星空なんて実際見たことなんてない。そんな星空が見れなくなってしまったのは人間のせいなのかなぁと、唐突に思った。
　鼻から空気を吸ってはいた。そうしているうちに寝てしまった。

五章

俺だってそんなに頭が悪いわけじゃない。今通っている高校の偏差値は高くもなく低くもなく平凡だけれども、低いところと比べれば俺何ていうのは、もう秀才でしょうがないと言うぐらいだろう。まぁこの高校では下の下だけどな…

よって、問題集のページをめくって問題を少し読んだらもう嫌になってしまい、逃避の為に寝てしまうといった状況である。ああ、悲しい性よ。

でも、歌にもあるではないか。『あし～たがある～さ、あすがある』とか。そうなのだ、明日があるのだ！俺には明日があるんだよ！

……だが…明日もあれば期日もあるさ。明日があるから期日があるのさ…いっその事、明日なんて来なければいいのになぁ…

まぁ…あれだな。そろそろ宿題をやらないと本当にまずいんじゃないの？って言われたぐらいだからな、妹に。本格的にまずい。

だから俺は今日からやりだそうというわけだ。助けを求めて博士の家へと向かった。

笑っちゃうぜ、まったく。

時刻は午後一時。只今勉強中。黙々しかし猛然とペンを動かして文字を書き勇んでいく。

博士は本を読みながら麦茶をちゅーちゅーやっている。

「なぁ、これ…」

「ん…どれ？」

と、こんな感じに解らない問題があったら聞くという、そういう方式をとっている。だが、解らない問題が多すぎて十問中五問は、聞くという無能ぶりを発揮してしまった。まったく、博士には足を向

けて寝られないなぁ。

午後三時。疲労したので休憩。
三時半再開。

午後六時。心労したので休憩。
七時再開。

午後八時。
「もう嫌だ！今日は終わり終わり！また明日な！」
机の上に広がっている問題集や、転がっているペンを鞄に放り込みながら叫びに近い感じで言った。
「まだ帰らないでよ。することあるんだからね」
「わかってるさ。でもまだだろ？ちょっと休憩だ。一休み、一休み、だよ」
床に放ってある本を取り寄せ枕にして横になる。
「今日は十時からだよ」

午後十時。玄関の扉を開けたら、雨が降っていたので円盤観測中止。家の中へ退散。
「どうするよ？」
「う～ん…どうすようかなぁ…」
何もする事が無いのなら帰宅しよう。そうなれば、珍しく早めに眠れそうだ。
「…クーラー強くない？弱めてくれよ」
少しの間だが暑い外気にさらされたので、クーラーの設定温度が低い事を実感して寒くなってしまった。
「寒かったら布団に入ってて。私はやることが出来たからさ」
と言われたので「用があったら呼んでくれ」とだけ言い、布団のある和室へ行って布団に包まった。

「気持ちいい…」
寒い中で暖かい布団に入ると気持ちいい。まるで桃源郷、ユートピアといった理想郷に来たような、そんなぁ、気分になる。

五分ぐらい経って、「うわぁぁぁ〜」と奇声が聞こえ、和室の扉が開き博士が、
「今日はもう終わり！帰っていいよ！」
何をやっていたか知らないが、上手くいかなかったのだろう。博士は上手くいかないと、怒ってしまう。
「もう寝るから！何にもしないで寝るからね！早くどいてよ！」
布団から押し出されてしまう。しょうがない。帰ろう。
「傘あるか？」
「玄関」
「借りるぞ」
「うん」
玄関に行き、安物の小さいビニール傘を借りて扉を開く。
外は激しく雨が降っていた。ザーザー降っていた。こんな小さい傘じゃ、ずぶ濡れになるのは明白だった。再び家の中へ退散した。
「あれ？どうしたの？」
和室に入ると博士に聞かれた。俺だって帰りたいさ！でも濡れるの嫌なんだよ。風邪ひいちゃうからな。
「雨が激しくて帰れない」
本の無いところに横になる。
「寝ちゃうの？」
「あんたも寝るだろ……寒いな。布団かしてくれ」
また外に出たのでさらに寒くなってしまった。
「はい」
と、俺に投げてきたのは布団ではなく白衣だった。変な温かさがあった。
「クーラーきっていいか？」

「駄目だよ。寒いから温かいんだから。温かいから気持ちいいんだよ…」
まぁ、もっともな意見だが今の俺には迷惑でしかない。
「わかった。もういい。寝よう。おやすみ」
白衣を被る。
「…ねぇ、前にも聞いたけどさ、夏休み終わったら助手どーする？」
「やめるだろうな。俺もそんなに暇じゃないんだ」
「そうだよね…やめちゃうよね」
「別に縁が切れるわけじゃあないだろう？そんな言い方するなよ。暇ができればまた手伝ったっていいさ」
「……ありがとう」
「そうだ。感謝してくれよ」

もうそろそろ、夏休みは終わる。終わってしまう。
成す事はなく、目指す事もない。
それでも俺は生きていた。正直暇だった。
むしろ感謝するのは俺のほうではないだろうか。暇潰しを与えてくれた博士に。
……まぁ、よくある逆転パターンだ。

終章

夏休み最終日。終わる、終わる終わってしまう。
俺の夏休み、はたしてこんな終わり方でよかったのだろうか？宿題は全て終わって、明日への準備は完璧だろうと思う、そんな終わり方で。
「いいんじゃないの。問題ないじゃん」
と言うのは妹だ。
「いや……何か物足りない気がする。分かってるんだけどさ、一応」
俺に足りないもの。それは焦りだ。今までの夏休みの最終日には、焦りまくって、焦りまくって、頭をかきむしりすぎて、ハゲて、頭皮を破って、頭蓋骨を削って、脳に到達するのではないかってぐらい、焦っていた。
毎年やっていたそれが、この年いきなりなくなってしまったから妙な喪失感を抱いてしまったと……ただそれだけの話だ。無駄に肥大させてしまった。だが俺には肥大させるに値する事なのだ。それくらい、今年はさっぱりしすぎてる。
やはり今日も博士に呼ばれている。そろそろ行くとしよう。そうしないと間に合わないからな。

「今日は何をするんだ？」
目の前に座っている博士に問う。こんな昼間に呼び出されるのは珍しいからな。円盤観測なんて出来ない時刻だ。
「今日が最後ですね」
質問に答えてほしい。
「最後だねぇ」
「最後という事で、何かこう、ぱーっと盛り上がろうと思ってね。

眠くないし」
「ほう。いいんじゃないですか。小粋ですな」
そういうのは悪くない。むしろいい。たまにはな。
「という事で今日は奮発してしまいました。かなり結構いろいろと買ってきました」
「金大丈夫なのか？」
少しまずいかなぁ、みたないな顔をしていたので思わず、
「どれぐらい買ったんだよ？」
「…そんなの気にしないでよ！大丈夫だから、全然」
全然て、駄目な時に使う言葉じゃなかったっけ？
「そう言うなら、いいや。気にしないぱーっとやろうじゃないか！」
「やろう、やろう！最後なんだから！今日は！」
そうだ。今日は最後なのだ。最後ぐらい、はしゃいでも問題なかろう。というよりも、最後だからこそはしゃぎたい。けらけら笑って、楽しみたい。まだ若いんだから、構わないだろう？
どうせ俺は馬鹿だからこんなこと思っているのかもしれないが、ここで一緒にはしゃごうとしている奴は馬鹿じゃない。馬鹿じゃないけどはしゃぎたいと思っている。
だから所詮同じ年齢の、同じレベルの人間なんだなぁ……と。

あぁ、やべぇ……すげぇはしゃいじゃってるよ、俺。普段の二十倍はテンション高いよ。めっちゃ、げらげら笑ってるよ。そして奴も笑っているよ。普段の三十倍はテンション高いよ、奴は。
あぁ、おいしいな、これ。超うめぇって。飲み物もおいしいなぁ。コーラだけど。
「お酒飲んじゃう？」
奴は言ったよ。
「飲めんのかよぉ？」
俺は言ったよ。
「いけるいける！」

奴は楽しそうだったよ。
「じゃあ飲もうぜ！最後だしな！」
俺は楽しかったよ。
でも酒を飲むにあたって不安があった。アルコール中毒だ。でも、たぶん大丈夫だろう。多少知識はあるからな。
そして俺と奴は酒を飲んだよ。でも苦かったよやっぱり。でもテンションは上がる一方だったよ。奴のテンションもやばかったよ。俺よりげらげら笑ってた。
そのうちふわふわしてきて、なんだがとっても楽しくなってさぁ。意味わかんないことやり出したよ、二人で。一発芸とか。俺は手品をやったんだ。指が長くなって大変だった。奴は舌が長かった。だって鼻にとどいてたんだぜ！長いぜ！まじで！
他にもたくさん面白いことやったんだけどね。よく覚えてない。いっぱいやりすぎて。あ、でも印象に深く残ってんのは、胸を触らせてもらったことだなぁ。神秘だった。馬鹿だよ、奴は。すっごい馬鹿。そして俺も馬鹿。
最高に面白かった。奴がこんなに面白い奴だったとは知らなかった。そして俺もこんなに面白い奴だとは知らなかった。俺は面白かった。奴も面白かった。
最高だ！滑稽だ！良かったぜ！こいつと遊んでてよ！

起きたら夜中。ほろ酔いも醒め、まわりの惨事に気がつく。散らかりすぎていた。本当に汚い。食べ物が散乱し、飲料が飛散していた。
そして己の惨事にも気がつく。パンツ一丁ではないか！素早く服を着て、博士を起こす。
「うぅぃ……何これ？きたねぇ……」
「片付けよう」
「うん」

そして俺たちはいそいそとゴミを片付けていった。
しばらくして、片付けが終了し、席につく。
「面白かった？」
そう聞いてきたので、
「最高だった。面白すぎた。だって俺起きたらパンツだけだったし……あんたは？」
「面白かったよ。すごく。テンション上がりすぎた。でも、上がりすぎて胸、触らせちゃったよ」
「え？まじで？覚えてねーよ。残念だ」
まぁ、嘘だが。
「お酒は怖いねぇ」
「まったくだ」

さて、もう午前五時だ。空は少し白くなってきた。もうそろそろ帰ろうと思う。
でも、帰る前に言っておこう。この気持ちが薄れて忘れてしまう前に言っておこう。
それは感謝であり、信頼であり、思考であり、俺自身だ。
全てが終わってしまう前に言おう。つまり告白。俺の思いを告げよう。
軽く笑い飛ばしてくれればいい。どうせ軽い言葉なのだ。それが丁度いい。
「最高だった。今日だけじゃなく、今までも。すごいよかった。一ヶ月ぐらいでここまで仲がよくなったのははじめてだ。あんたは最高ランクの友人だ」
言ったぜ！俺の言葉！
「私も楽しかったよ。神野君は最高の友達だからね、また遊びに来ていいよ」
言われたぜ！あいつの言葉！
これでよかった、最高だ。これぞ友情！

「じゃあ、もうそろそろ帰らないとな。時間的にまずいから。じゃあな、また」
「バイバイ、またね」
そう、次があるのだ。また博士と出会う日は、今日である。
夏休みは終わったが、友達の関係がなくなる訳じゃないんだ。

玄関を出て、マンションを出て、朝日が俺を照らす。気持ちがよかった。
少し歩いたところで声が聞こえた。
「またね〜」
ベランダで奴が叫んでいた。手を思いっきり振って、応対した。
朝日が綺麗だった。どう綺麗かと言うと、まるで生命の躍動、全ての充足。俺のための光。
どこまでも静かな今は、この地球に俺と奴だけしかいないかの様に思わせる。
気分はどこまでも高く舞って、肢体はこの上なく軽い。
まるで、いい気分の様だ。
笑って、にやけて思った。

ありがとう、友達。ここまで気分がいいのはそうある事じゃない。
そしてお前も気分がいいだろう?俺に感謝してくれよ。

そしてまた会おう、我が友!

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4626c/

博士は我が友！

2010年10月13日17時22分発行